

目白大学新聞



「目白大学新聞」ウェブサイト
http://www.mejiro.ac.jp/univ/mu_journal/index.html

多様性の力とパイオニア精神 目白大学20周年を迎えるにあたって

目白大学は2014年、4年制大学として20周年を迎える。埼玉県岩槻での設立当初は1学部2学科、第一期生は321名しかいなかった大学が、現在では6学部16学科と、わずか20年で新宿・岩槻の両キャンパスで約6360人以上の学生が学ぶ総合教育機関へと成長した。学生数だけでも約20倍に増加。大学院も1999年に1研究科1専攻で始まったが、2012年には17研究科12専攻を有するまでに成長している。佐藤弘毅学長にこの20年と、これからの目白大学について語っていただいた。

今年、本学は20周年を迎えます。感無量の一言に尽きます。90年代から女性を中心に大学への進学率が急激に上昇しました。その中で目白大学をはじめ、多くの私立大学が設立されました。「大学」という最高教育機関が成長しながら生き残ることは、生半可なことではありません。短期間でこんなに急成長を遂げた大学は他にないと思いますし、このような今を迎えられたことは本当に嬉しいです。

——本学が急成長できた理由とは？
教授陣と学生の努力が最大の要因だと思います。教授陣は、研究を長年続けてきた人はもちろん、企業に勤めていた方など多様な背景をもっています。「多様性は力」という言葉があるように、個性が大きな力として様々なもの見方や考え方があつたことは強みだと思います。学生たちは、「バ



目白大学 佐藤弘毅学長



岩槻キャンパス建設前。
当時、同キャンパスはまったくの更地だった。



建設が完成した校舎へと続く一本道。
平成6年2月に「彩の国さいたま景観賞」を受賞。

Index	
・「考える人になれ！」 ——第一期先輩からの 直言——	⇒2面
・「ミスター目白」 @岩槻 ・アベノミクスと経営 「自らの専門性を磨き、 そのトップになれ」	
・新任副学長紹介 佐藤郡衛教授 ・目大生 金メダルに輝く！ ・「復興金石新聞」	⇒3面
・「メジサミ」 ・岩槻のダイビング実習 ・学食で感じる 日中異文化	
	⇒4面

イオニア精神」が印象に残っています。目白大学の設立当初、自分たちがこの大学の歴史を作り上げていこうという迫力・気概に満ちた精神で入学してきたことを、嬉しく感じていました。その学生たちが教授陣と共に努力したこと。そしてそれに協力してくれた職員やご家族の方々があつたからこそ、ここまでこられたのだと思います。

——今後、本学が果たしていく社会的役割とは？
「教育」、「研究」、「社会貢献」です。学生を人として、社会人として育てあげ、送り出すということ。また、教授陣が研究によって、新しい「知」を作り上げていくことを支援していくこと。そして最近重要視されている「社会貢献」です。メディア表現学科の行っている「めじてれび」の制作や、心理カウンセリング学科が行っている児童の心のケアの手伝いはその一つです。学科単位での得意分野を活かして地域や国に貢献する。また、教授陣が専門分野の本を執筆するなど大学の指針は学内だけでなく、外にも向かっているのです。この3つを目白大学の長所として生かして、どのよ

うに発展させていくかが、今後の課題となってくると思います。

——本学がさらに社会に広く認知されるには？
教授陣の研究成果が認められること、大学の社会貢献度が認知されることです。さらに大切なことは毎年卒業していく2000名近い学生たちが社会で活躍し、大事な人材として社会に必要不可欠な存在となることだと思います。それがこれからの大学の名声・評価に繋がっていくと信じています。

——「グローバル化」に向けた取り組みは？
世間がいう「グローバル人材」というのは世界的な舞台で活躍する人をいいますが、もちろんその活躍はとても重要なものですが、それだけがグローバル人材ではありません。留学などを経験したことによって、視野・考え方を広く持つことができるようになる人材も「グローバル人材」です。日々生きているだけで世界と関わっている、ということを理解し、実感してくれる人を養成する、それが「グローバル人材

の育成の基盤であると思います。

——少子化が今後さらに進んでいきますが、その中で目白大学の在り方とは？
将来に向かって、何が必要とされているかを見極め、それに合わせて改革を進めていく。それによって若い学生の関心を集め、他大学との競争に打ち勝っていくということとです。また、日本は先進諸国の中でも大

学生の年齢が「若い」という特徴があります。80年近い生涯の中で、たった4年間だけで学びの時間を終わらせてしまうのではなく、もっと自分を高めたいという向上心を持つことが大切です。自分をさらに磨くために入学した人に対して、その向上心を満足させるのです。

さらに私は「生涯学習社会」として人が学びたいと思ったときに、いつでも学べる世の中が理想だと考えています。就業の場と学びの場をうまく繋げていくことが今後の時代には必要となつてきます。目白大学は、若い世代の教育だけでなく、今後は中年・高齢者の学びのニーズに対応できる大学となつていかなければならないのです。
(編集部3年 小田阿弥)



当時の岩槻キャンパスの工事風景。
ここに人文学部地域文化学科・言語文化学科が開学した。



開学した新キャンパスに学生たちが集う。
卒業生数は1万人に達している。

アグネス・チャン講演

実行委員長の同学科1年の目黒友樹さんは、講演実施の意義をこう語った。「企画を通して自分にはあくまで考えているだけです。実際はその平和を目指して行動していくことが大切なことなのではないかと気がきました。今までボランティア活動にそれほど興味を持つことはありませんでした。今後は自分ができることから行動していこうと思います」

サプライズ弾き語り！

人間学部児童教育学科主催で昨年11月23日、本学創立20周年記念講演の一環として行われた「平和・文化・こころを考える—平和の詩の朗読を通して—Peace Poem Project vol.2」。この詩の朗読の企画は、目白大学客員教授を務めたことのあるアグネス・チャンさんの発案で始められ、当日、弾き語り一曲歌った。「どの時代でも世界を変えるのは大学生です。大学生が中心になって世界を変えていって欲しいです」と、アグネス・チャンさん。



「考える人になれ！」

第一期生先輩からの直言

産

声をあげたばかりの大学に入学した学生は、何を考え、何を学び、そして、今、何を振り返っていかざるを得ないだろうか。1994年に入学した第一期生である渡辺尚吾さん（人文学部言語文化学科卒業・目白大学同窓会会長）と、山西茂さん（同学部地域文化学科卒業・同会副会長）に当時を思い起こしてもらった。

「なぜ、目白大学に入学しようと思ったのでしょうか？ 何に惹かれたのでしょうか？」

渡辺：新しい大学で何か新しいことにチャレンジし、自分たちで歴史を築いていける面白さを感じたからです。当時、新設大学がいくつか開校した時期でしたが、自分の関心にマッチし、またマスコミ専攻もあったので目白大学を選びました。入学後は、学生全ての顔と名前が一致するほどのアットホームさでしたが、学生の年齢や国籍、経験も幅広く、魅力的な同期と多く出会えたことは私自身の財産でもあります。

山西：浪人中に大宮駅のポスターを見て気になって調べたところ興味があった世界史を学べそうだったのと、歴史の教員免許を取れそうだと感じたからです。でも、第一期の理由は、第一期の学生募集だったことですね。何もないので、何でもできると感じたのです。

「4年間で一番思い出に残っていることは何でしょうか？」



人文学部言語文化学科卒業
目白大学同窓会会長
渡辺尚吾さん

渡辺：インフラと教育環境しかない大学に学生組織をから結成し、運営資金を集め大学らしい環境を築けた経験です。私自身は、その基礎づくりの中心になって初代学友会委員長に就任しました。特に思い出にあるのは、「第一回桐祭」の開催で1994年12月に開催したことです。日本で一番遅い大学祭だったので、4月から学生の組織づくり、活動資金を集め始める間に合ったのが12月開催だったので。何とか大学の創立と大学祭の開催回数を合わせようという思いでした。

山西：入学して岩槻キャンパスに学友会を発足させるための会議を泊り込みで12時間やったり、学園祭や、スポーツフェスティバルを企画したり、卒業アルバムや同窓会などと、毎年のように何かつくっていたことです。何かをつくる楽しさを体験できたことが、一番の思い出です。今も当時の同期と一緒に仕事で何かできないかを画策しています。

「卒業されて20年、目白大学で受けた教育や経験はどのように役立っていますか？」

渡辺：何も無い環境で多くの大人たちと議論しあい、新しいものを築いていったチャレンジ精神です。課外活動に一生懸命だった反面、勉学をもっとしておけば良かったと今更ながら後悔しています。多くの留学生と仲間になれたことでそれぞれの国の価値観の違いなど、国際的な視野を身につけられたことも経験として大きいです。

山西：多分、自分の人格形成の多くに影響していると思います。当時は、先輩もいなかったため教職員の方が、よき先輩であり、目白大学をつくる同志であり、親友だった気がします。学生というより、一人の大人、社会人として接してくれたことが、今になって良かったと思います。



人文学部地域文化学科卒業
目白大学同窓会副会長
山西茂さん

「今、在學生に伝えたいことは何でしょうか？」

渡辺：「考える人になれ！」受身では、社会人になってから周りの競争相手と戦っていきません。「常に考え、自分の答えを自分の言葉で言える」人材になって欲しいです。そのためには授業でしっかりと議論し、相手の伝えたい本質が何かを理解すること。今のうちから訓練してください。

山西：色々ありますが、目白に入ってきたと思えることを見つけてもらいたい。楽しいことより大変だったときの思い出の方が、その後の生き方の糧になると思うので、勉強と色々なことにチャレンジしてもらいたいと思います。

20周年企画 ミスター目白 @岩槻 ～初代「ミスター目白」は爽やか男子～



ミスター目白の和田康平さん

目白大学の「桐祭」と呼ばれ、岩槻キャンパスは「桐祭」といいます。その双方で「ミコンテスト」が主催されたが、「ミスターコンテスト」が行われたのは岩槻だけだった。「桐祭祭が今年で20周年を迎えるにあたって、何か特別なことをしたいという学生の思いがあったから」と、桐祭実行委員長を務めた看護学部看護学科

2年生の福元志帆さんは説明する。このようなコンテストが桐祭で行われるのは、初めてのことだという。

「2013 桐祭祭グランプリコンテスト ミス目白・ミスター目白」では、桐祭祭開始までにコンテスト実行委員会からの指名、ないしは自らの立候補によって男女それぞれ4名が選出された。

その男女各4名の写真やプロフィールが、桐祭開催前にキャンパス内に張り出され、設置された投票箱に学生が投票した。桐祭当日の昨年10月26・27日には、一般の来場者も投票した。加えて学園祭初日、特設ステージで女子学生はウエディングドレス、男子学生はタキシードに身を包んで自らをアピールし、特別審査員の投票が行われ、2日目の午後のステージでミス目白とミスター目白が決定した。

見事ミスター目白に輝いたのは、保険医療学部言語聴覚学科2年生の和田康平さん（19）だ。和田さんは長野県出身で、兄と妹がいるが、兄の影響を強く受けて育った。保険医療について学ぶきっかけとなったのも、現在リハビリテーション関係の仕事に就いている兄の影響だという。そんな和田さんは現在サークル活動には参加していないものの、中学校や高校の部活動でハンドボールやバスケットボールの経験があり、運動は得意で自信があるという。

「優勝できるとは思っていなかった。立候補するときはステージでも、とにかく少しでも盛り上げられたらという心境だった」と、和田さんは謙虚で柔らかい口調で語る。

優勝の賞品として、和田さんには「デイズ」のペアチケットが贈られた。またコンテスト優勝をうけて後日キャンパス近くの駅、東武野田線の岩槻駅改装の際に使用する宣伝ビデオへの出演が決まった。

「コンテスト優勝後、それまであまり関わりのなかった先輩などの学生から声を掛けてもらえるようになりました。ミス目白になったことは大学生活での大きな思い出になるので、将来色んな人に自慢できると思います」と、嬉しい笑みをこぼした。

（編集部3年 武山和正）



安倍首相のブレーンの一人
中野伸之さん

経

経営学部と大学院経営学研究所が本学創立20周年記念講演の「環境として主催した「アベノミクスと経営」が昨年11月21日行われた。テーマはアベノミクス下での経営のあり方で、元日銀審議委員の中野伸之さんと、日産自動車元執行役員（VP）の増田譲二さんが熱弁を振るった。

アベノミクスと経営 自らの専門性を磨き、そのトップになれ

を日本の経営者は行っていかなくてはならないと指摘。特にエネルギーやロボットといった分野で若い世代が「イノベーション」を実現していくことで、日本経済は元気を取り戻せると訴えた。

二人目の増田譲二さんは、日産の元VPで、カルロス・ゴーン社長兼経営最高責任者と共に日産をV字回復させた功労者だ。増田さんは現在の日本の製造業において、技術者の流出、経営判断の鈍さやコミュニケーション上の問題に至るまで様々な課題を挙げた。その解決法として、「コストは掛けるもの、減らすもの」といった考えがある。つまり、「日本の古くからの「もったいないの心」に通じた考え方で、無駄遣いをなくそうという精神で企業の利益追求をしていく」ということである。

増田さんによると、アベノミクス経済においても、「もったいないの心」を持つことは大切であり、経営に対する認識を見直す必要がある。これからの正念場ともいえる製造業や、他の業界においても10年後の目標、コミュニケーションや競争力といった観点から経営の大枠を作り上げ、迅速な経営判断ができるかがさらに問われていくことになるだろう。

二人の講演者が共通して発言していたことは、自分の専門性を磨き、そのトップになれるということであった。自分の専門領域を深くすることは、今後日本だけでなく、世界で競争していく上で大切なことだと口を揃えて強調していたのが、非常に印象的であった。

（経営学部経営学科3年 小長谷亮太）



元日産自動車 VP
増田譲二さん

「経営学部と大学院経営学研究所が本学創立20周年記念講演の「環境として主催した「アベノミクスと経営」が昨年11月21日行われた。テーマはアベノミクス下での経営のあり方で、元日銀審議委員の中野伸之さんと、日産自動車元執行役員（VP）の増田譲二さんが熱弁を振るった。」

新任副学長紹介

佐藤郡衛教授

Q&A



プロフィール

東京大学大学院博士課程修了 博士（教育学）
東京学芸大学教授、理事・副学長を経て、10月より本学副学長、人間学部児童教育学科教授。

1 「郡衛」という名前の由来

「福島県会津の出身です。家に代々伝わる名前が本名になりました」

2 目白大学の第一印象（10月に着任されてから）

「キャンパスの清潔さと学生の人なつこさでしょうか。まさに第一印象ですが」

3 趣味

「スキー、読書、食べ歩きなど……」

4 余暇ないしは休日の過ごし方

「ウォーキング、本屋さんめぐり」

5 ペットの有無

「いません」

6 座右の銘

「座右の銘というほどではありませんが、『日々是好日』をモットーにしています。毎日、新しい気持ちで過ごそうという願いです」

7 好きな本のタイトル

「読書が趣味なので、比較的多読です。最近おもしろかったのは三浦しをんの『神去なあなあ日常』と原田マハ『楽園のカンヴァス』です。大人買います」

8 学生へのメッセージ

「『三昧』という言葉があります。何事も徹してやり、やることを楽しめるようになるといいですね」

再出発した新聞

復興釜石新聞の今を探る

釜石市 現地ルポ

被災地の報道が減っている今、現状を伝えるため、私たちは震災後に新設された復興釜石新聞の編集長である川向修一さん（60）にインタビューを行った。

復興釜石新聞社は再出発した新聞社である。釜石市の夕刊紙であった岩手東海新聞社は、東日本大震災により被災したことで休刊となった。岩手東海新聞社の記者であった川向さんが釜石市長から新聞の復活を依頼され、市の広報を請け負う形で発行したのが復興釜石新聞である。岩手東海新聞社の従業員を含めた11名の社員が、4ページ刷りの新聞を週2回、釜石市全世帯および県外に避難した釜石市民に向け2万

被災地の報道が減っている今、現状を伝えるため、私たちは震災後に新設された復興釜石新聞の編集長である川向修一さん（60）にインタビューを行った。

復興釜石新聞社は再出発した新聞社である。釜石市の夕刊紙であった岩手東海新聞社は、東日本大震災により被災したことで休刊となった。岩手東海新聞社の記者であった川向さんが釜石市長から新聞の復活を依頼され、市の広報を請け負う形で発行したのが復興釜石新聞である。岩手東海新聞社の従業員を含めた11名の社員が、4ページ刷りの新聞を週2回、釜石市全世帯および県外に避難した釜石市民に向け2万

復興釜石新聞社は再出発した新聞社である。釜石市の夕刊紙であった岩手東海新聞社は、東日本大震災により被災したことで休刊となった。岩手東海新聞社の記者であった川向さんが釜石市長から新聞の復活を依頼され、市の広報を請け負う形で発行したのが復興釜石新聞である。岩手東海新聞社の従業員を含めた11名の社員が、4ページ刷りの新聞を週2回、釜石市全世帯および県外に避難した釜石市民に向け2万

復興釜石新聞社は再出発した新聞社である。釜石市の夕刊紙であった岩手東海新聞社は、東日本大震災により被災したことで休刊となった。岩手東海新聞社の記者であった川向さんが釜石市長から新聞の復活を依頼され、市の広報を請け負う形で発行したのが復興釜石新聞である。岩手東海新聞社の従業員を含めた11名の社員が、4ページ刷りの新聞を週2回、釜石市全世帯および県外に避難した釜石市民に向け2万



復興釜石新聞 編集長 川向修一さん



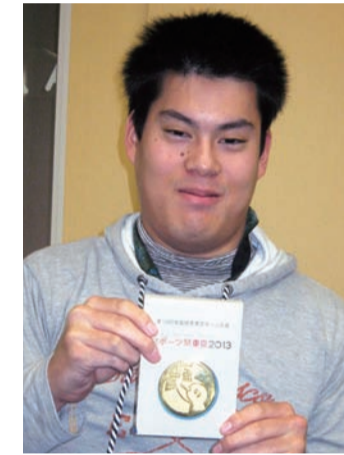
小さな2階屋にある編集部

被災地のメディアは今どうなっている

被災地のメディアは今どうなっているか。そのような問題意識を持ち、私たち目白大学メディア表現学科牛山ゼミ生は昨年9月1日から3日間岩手県にて、武蔵大学松本ゼミ生と合同でゼミ合宿を行い、あの東日本大震災から3年がたった現地での様子を探った。

被災地のメディアは今どうなっているか。そのような問題意識を持ち、私たち目白大学メディア表現学科牛山ゼミ生は昨年9月1日から3日間岩手県にて、武蔵大学松本ゼミ生と合同でゼミ合宿を行い、あの東日本大震災から3年がたった現地での様子を探った。

被災地の現状を知ってもらい、そしてその情報を周囲の人々と共有する。そんな些細なことだけでも忘れられないことに繋がるだろう。私たちの行動と報告がそういった行動のきっかけになれば幸いだ。



人間福祉学科 2年 叶賀大陸さん

浅利さんは今年で3度目の出場となるが、初めて代表に選出されたときの気持ちは、素直に嬉しかったという。また、当時中学3年生と大会最年少で、周りの人たちがうまうまやっていたいけるか不安だった。叶賀さんも同様で、本当に自分が大会に出場しているのかと強い不安を感じたという。

浅利さんは今年で3度目の出場となるが、初めて代表に選出されたときの気持ちは、素直に嬉しかったという。また、当時中学3年生と大会最年少で、周りの人たちがうまうまやっていたいけるか不安だった。叶賀さんも同様で、本当に自分が大会に出場しているのかと強い不安を感じたという。

浅利さんは今年で3度目の出場となるが、初めて代表に選出されたときの気持ちは、素直に嬉しかったという。また、当時中学3年生と大会最年少で、周りの人たちがうまうまやっていたいけるか不安だった。叶賀さんも同様で、本当に自分が大会に出場しているのかと強い不安を感じたという。

大会が行われた。この大会は2001年に始まり、今回で13回目の開催である。今回の大会に本校の学生2人が東京代表として出場、見事金メダルを獲得した。50メートル走で金メダルを獲得した短期大学部ビジネス社会学科2年の浅利幸恵さんと、スラローム*1で金メダルを獲得した人間学部人間福祉学科2年の叶賀大陸さんだ。

浅利さんは今年で3度目の出場となるが、初めて代表に選出されたときの気持ちは、素直に嬉しかったという。また、当時中学3年生と大会最年少で、周りの人たちがうまうまやっていたいけるか不安だった。叶賀さんも同様で、本当に自分が大会に出場しているのかと強い不安を感じたという。

浅利さんは今年で3度目の出場となるが、初めて代表に選出されたときの気持ちは、素直に嬉しかったという。また、当時中学3年生と大会最年少で、周りの人たちがうまうまやっていたいけるか不安だった。叶賀さんも同様で、本当に自分が大会に出場しているのかと強い不安を感じたという。

浅利さんは今年で3度目の出場となるが、初めて代表に選出されたときの気持ちは、素直に嬉しかったという。また、当時中学3年生と大会最年少で、周りの人たちがうまうまやっていたいけるか不安だった。叶賀さんも同様で、本当に自分が大会に出場しているのかと強い不安を感じたという。

目大生 金メダルに輝く!



叶賀大陸さんが獲得した金メダル



ビジネス社会学科 2年 浅利幸恵さん

「障害のある私でもスポーツを極めて、色々な人の支えのおかげでこんな大きな大会に出ることができました。今何かに迷っている後輩たちも諦めなければ絶対に大丈夫!」と、浅利さん。「やりたいことはとことん突き詰めてやること」が大切だとスポーツを通して学びました。皆さんも頑張ってください!と、叶賀さんも学生たちにエールを送る。

（編集部3年 西田亜侑美）

本音をぶつけ合った「メジサミ」

学生と教職員の交流会開催

学生、教職員が膝を交えて本音で話し合う「サミット」が初めて、目白大学新宿キャンパスで昨年11月20日、学生会本部執行委員会の主催で開催された。「メジサミ」とは学生と教職員が大学の様々な問題を討議し、意見交換する交流会である。

テーマはもちろん、どうすれば大学をより良く成長させられるかだ。会場には80名近くの学生と教職員が集まり、佐藤弘毅学長、佐藤郡衛副学長も参加した。

交流会では各テーブルで様々な意見が交わされた。話題として多く挙がったのは西武新宿線中井駅から本学への通学路にある「開かずの踏切」についての意見だ。学生側からは「遅刻から欠席の判断基準を緩くして欲しい」などの声があがった。教職員側からは「教員によって遅刻の判断基準が違うのは問題であり、基準を明確化する必要がある」といった意見が聴けた。また教

員から「大学生活は充実しているか」という質問が投げかけられると、「友達との生活は充実している」「学びたい勉強ができていない」「転学を考えていたが、目白大学で続けてよかった」など腹を割った意見が出た。

学長、副学長もディスカッションに参加し学生と交流を図った。副学長は実際に新宿キャンパスで感じる、設備やサービスの改善点などを指摘。「学食のメニューを増やした方がよい、値段を考えて欲しい」など学生と同じような改善点も挙がり、意見交換は盛り上がった。

閉会式では「メジサミ」の主催者の一人である佐々木達将さんが、今回の交流会を振り返った。「主催側の自分たちもディスカッションに参加出来て良かった。今回挙げた改善点などを学生会の活動に活かしていきたい」

学生と教職員の距離が離れがちになって

しまう大学生活。このようなざつとばらんな意見交換の場を設けることで、普段は気にすることがなかった教職員側から見た目白大学に気がつくことができた。また、大学側がどのような不満を学生に感じているのか、ということも今回の交流会で知ることができた。

「メジサミ」は今回を皮切りに毎年開催する予定だ。今後、学生教職員共に参加者が増え、多くの意見が交換・共有されることを期待したい。(編集部3年 松本宗弘)



学生と議論を交わす佐藤学長

「メジサミ」で討論された主な議題

- ・授業中の学生の私語がうるさい
- ・テスト・レポートなど答案用紙を返却して欲しい
- ・履修登録の際に動画などで選択授業の雰囲気を知りたい
- ・成績閲覧期間を長くしてほしい(学生ネットサービス)
- ・別の学科や学部との交流がしたい
- ・シラバスの内容と違うことをしている授業がある
- ・学内の分煙を徹底して欲しい(喫煙所外で喫煙している学生が多く見られる)
- ・学内のバリアフリー化の推進
- ・フレッシュマンセミナーの必要性について

学食で感じる日中異文化

留学生の視点から

目白大学には、コンビニと食堂があり、この二つの場所が大学の教師と学生たちに食事を提供している。食堂の主な料理は丼と麺類である。例えば、唐揚げ丼、ラーメン、きつねうどんなど。中国の大学にも目白大学と同様、コンビニや食堂がある。だが、食堂は少々違う。主な料理は炒め物、丼、麺類、ミニ鍋などである。例えば、鶏肉とピーナッツのソース炒め、トマトの卵炒め丼、スベアリブ麺、寄せ鍋など。これぞ日中の食文化の違い、料理の「異文化」であろう。

生もの×火を通す

日本料理といえば、外国人が最初に思い浮かぶのはやはり生ものである。日本人は子供のころから生ものを食べ始め、生ものを食べるのは普通の飲食習慣になっている。寿司や刺身などは、外国人から見ても、まさに日本の食文化ではないのかと考える。一方、中国は古くから「生ものを食べる」と健康によくない」という伝統的な飲食観念があるので、食べ物を生のままに食べるのではなく、火を通してから食べる。近年、海外の飲食文化の影響で、生ものを食べる人が増えているが、その食べ方を受け入れられない人もまだ多い。

海魚×川魚

海に囲まれ、海産物が豊富な日本は、海魚や貝類などをよく食べる。日本では「旬の魚」という言葉があり、例えば、春は太刀魚、夏はイワシ、秋は秋刀魚、冬はブリ。食卓にはごはん、漬物、味噌汁、魚料理が並び、おいしい魚を食べるのが日本の伝統的食文化だといえよう。

食事マナーの「異文化」

日本人は食事前に「いただきます」を言い、食事後に「ごちそうさまでした」を言うのが普通である。これが日本の食事マナーで、日本固有な食文化の一部だといえる。それに対し中国は食事の前後に日本のような挨拶の言葉を使う習慣がない。しかし、食事の時間帯に知り合いを見かけた際、あるいは人を食事を誘いたいときに、「ご飯を食べましたか」という挨拶をする習慣がある。それが中国の食事マナーで、人に対する親切な気持ちを表す一つの表現だといえる。

サラダ×青菜炒め

元々西洋料理であるサラダだが、現代の日本では日常的に食べられている。家庭ではもちろんのこと、お弁当の中のキャベツサラダや、居酒屋でもアボカドサラダやポテトサラダなどがある。サラダは、もはや日本人の食卓に不可欠な「野菜料理」だと言えるだろう。

一方、中国も西洋の食文化の影響でサラダを食べる人がいて、特に西洋文化を多く吸収する若者たちにとってはサラダが大好きである。しかし、中国では、洋食店以外普通のレストランで食事をすれば、メニューに載っているのはサラダでなく、青

岩槻キャンパスのダイビング実習 海に向かう「メジダイバー」たち

目白大学保健医療学部と看護学部の基礎教育科目で学生に評判の授業がある。それはダイビング実習だ。内容は夏休み中に静岡県伊東市で実習を行い、スキューバダイビングライセンスであるCカードを取得するもの。実習前に大学内で学科講習を行い、現地でライセンス取得のためのプール講習を受け、学科試験と海の中のスキルテストに合格しなければならぬ。23年度から開講され今年度で3年目、希望者のみで授業料は自己負担にも関わらず、23年度が27名、24年度が35名と年々増加して今年度はリピーターも含めて60名の学生が受講した。



静岡県伊東の新井の浜でダイビング 右が長谷部綾香さん

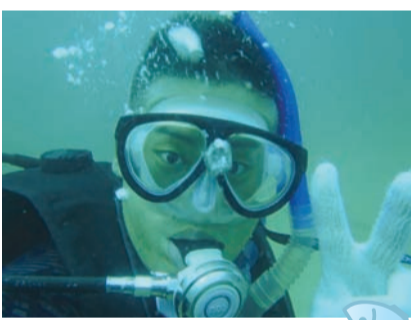
担当している作業療法学科の櫻井健太助教。体育専門学部ではなく、医療系学部の基礎教育科目としての設定は珍しい。なぜダイビング授業を実施しているのだろうか。

「私の専門分野は野外運動で自然と親しむ活動を授業に取り入れたいと考えていたため、授業を設定するにあたり、当時の授業対象者にスポーツ・健康授業に対するアンケート調査を行いました。その中で受講したい種目で上位になったのがマリンスポーツだったことから、学生のニーズが高いと考えて設定しました」と、櫻井健太助教。

受講者の一人看護学部2年生の長谷部綾香さんは、昨年度ライセンスを取得したが、今年度もリピーターとして参加した。

「きっかけは授業紹介で先生が作ったDVDを観て、自分も魚を間近で見たいと思ったことです。最初は海に入るの怖かったんです。でも海に潜って海面を見たときに光が差し込んで、『綺麗だなあ』って感動して不安も消えちゃいました。今後はみんなで冬の海に潜る計画です。小笠原とか沖縄に行つて潜ってみたいです」

櫻井助教によると、ダイビングは医療系



ダイビング中の櫻井健太助教

の学部だからこそ必要ではないかと指摘する。 「学生たちの就職先は病院が多いので不特定休ということも避けられません。ダイビングならひとりでも楽しみに行けます。またストレスが多い職場かもしれないですが、趣味として自分を癒す方法を持つていければきっと折れることなく頑張れるのではないかと思っています」と櫻井助教。

これからの綾香さんの「メジダイバー」たちが誕生していきそうだ。

目白大学新聞について

ご意見・ご感想をお寄せ下さい

E-MAIL : shimbun@mejiro.ac.jp

FAX : 03-5996-3060

編集長 小田阿弥

デザイン 杉本 航

編集 大友邦裕 松本崇弘 武山和正

西田亜侑美 周 静

(編集部3年 周静)